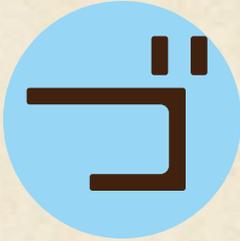




かさおに
地



域を
元気



にする

保存版！



まちづくり
人

ひと

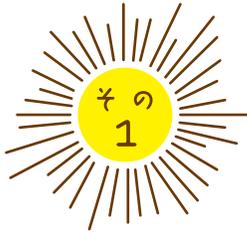
（ まちづくり協議会の活動に ）
（ 取り組まれている皆さんの想いを ）
（ インタビューしました！ ）

これだけは知って欲しい

はじめに

まちづくり協議会の 2大事実

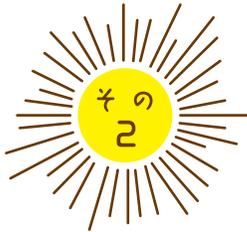
what is
MACHIDUKURIKYOUGIKAI



皆さん一人ひとりがまちづくり協議会会員！

皆さんはまちづくり協議会をご存じでしょうか？知っているけど自分には関係ないと思っている方もいるかもしれませんが、**笠岡市には24のまちづくり協議会があり、皆さんは必ずどこかのまちづくり協議会のメンバーになっているのです。**

まちづくり協議会は地域住民、公民館、学校、企業など笠岡市を拠点とするすべての個人や団体から構成されています。



目的は「みんなで支え合う元気な地域づくり」

少子高齢化や人口減少が進むことで、自治会や町内会の機能が低下し、地域の元気がなくなってきています。そこで、地域の皆さんが集まって話し合える場としてまちづくり協議会をつくりました。

ここでは、**地域の皆さんが地域の課題や魅力について話し合っ取り組むことで、人とのつながりづくりや元気な地域づくりが行われています。**

(例)



みんなで支え合う元気な地域づくり



step

3

まずはちょっとだけ見学／

拠点を尋ねてみる

まちづくり協議会の拠点施設では定期的に打ち合わせが行われています。最初からいきなりメンバーになるのではなく、打合せや運営メンバーの雰囲気やまをまずは知るために「見学」をしてみると安心です。

拠点施設の
スタッフに
打合せ日程
を尋ねる



step

4

一歩ふみだして／

アイデアを提供してみる

まちづくり協議会の活動に参加した際に、運営の方に「こんなことをしてみてもどうか?」「あんなことだったら自分にもできる」とアイデアを気軽に伝えてみましょう。その一言がより良い地域につながります。



自分の特技や
仕事のスキル
を話してみる

step

5

いっちょやってみましょうが!／

運営に参加してみる

まちづくり協議会を運営をしている人たちは、熱い思いを持って参加しています。その熱い思いに共感共鳴して一緒に活動を盛り上げてみませんか?

まちづくり協議会の部会員 or 理事
or 役員など運営メンバーになる



次のページからは
運営サイドの
生の声をインタビュー!!

Go!!

03

まちづくり協議会への

参加のカタチ アレコレ

how to join

まちづくり協議会には、それぞれの人に合った参加の形があります。

このページでは、それぞれの人に合ったいろんな参加の形を紹介したいと思います。一人の参加者が増えるだけで地域は今より元気になっていきます。

step

1

活動をしなきゃ始まらない!／

活動を知る

まちづくり協議会の活動は、広報かさおかなどで知ることが出来ます。協議会によっては独自の広報紙を発行したり、回覧板などでお知らせがあったりします。まずは自分が住んでいる地区でどんな活動が行われているのかを知るところから始めてみましょう。



広報かさおか、地域の
回覧板、掲示板を
チェック

step

2

THE お手軽&楽しい!／

活動に参加してみる

まちづくり協議会では、地域の納涼祭や防災訓練、地域美化活動など様々な活動を行っています。気軽に楽しく参加できるものから、汗水流して地域貢献できるものがあり、地域の方々との交流する機会にもなります。

拠点施設のスタッフ
に活動日や参加方法
を尋ねる





新栄会のユニフォームを着る左から副代表の国定哲也さん、代表の畝山弘児さん、会計の平本聡彦さん

地域を元気にするまちづくり人
Kouji Uneyama

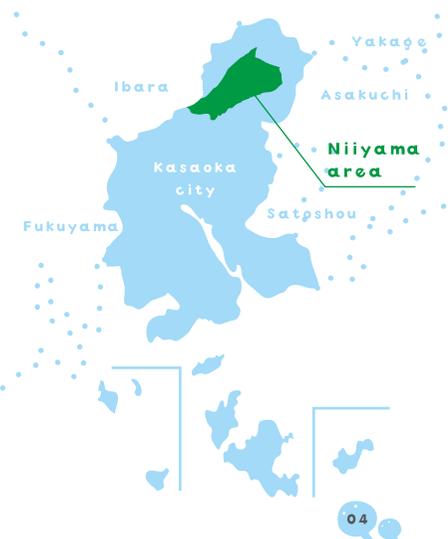
畝山弘児さん

自分たちが見てきた大人の背中を
今の子供たちに見せてあげたい。

新山地区自治会の青年団的存在である「にいやま新栄会」。代表を務める畝山弘児さんをはじめ、20~40歳代の気鋭のメンバーが地元・新山のために尽力しています。

初代チーム名は「NKB48」
新山地区の消防団は40歳前後で卒団するのが通例のため、卒団後も地域活動を継続したいメンバーが、約5年前に団体を結成。そのときの団体名は、「NKB48」。ま

なぎ姿でにつこり胸を張る。
代表の国定哲也さんも、赤色のつなぎ姿で迎えてくれたのは、
新山公民館で迎えてくれたのは、
つなぎ姿の男性3人。彼らは新山
地区自治会で地域活動を行う「に
いやま新栄会」のメンバーだ。「い
いでしょ、このユニフォーム。着
るとやる気出ますよ」と話すのは
代表の畝山弘児さん。隣に座る副
代表の国定哲也さんも、赤色のつ





「みんながいれば、
ひらめきも実行してがたちにできる」 畝山さん

「それぞれ仕事をしながら活動を続けられるのは、
家庭の支えがあってこそ！」 平本さん

るでアイドルグループのような
ネーミングだが、「新山草刈りボー
イズ48歳以下」の略称と、畝山さ
んが教えてくれた。隣で聞く平本
聡彦さんがさらに冗談を重ねる。
実に賑やかな彼らだが、もともと
地域活動を行う団体の名前を受け
継ぎ、3年前から「にいやま新栄会」
へと団体名を改めた。現在、約40
人が在籍しているという。

地域の草刈りが活動の中心

発足当初からの草刈りは、今も
中心的な取り組みだ。依頼を受けて
各地へ出向く。放火の危険性や交
通の妨げになる休耕田を、消防団
と連携して草焼きし、単なる景観
美化だけでなく、地域の安心・安
全のために飛び回る。

夏のそうめん流しや体験キャン
プなど、子どもたちのための企画
にも力を注ぐ。それぞれ子を持つ



にいやま新栄会のメインの活動が草刈りであり、依頼のたびに土日を利用して行う。放火の危険性のある場所の草刈りや草焼きも消防団と連携して行うこともある。

親として「何かしたい」という思

いが強いが、それだけではない。「自

分たちがこうして活動しているの

は、昔、大人たちにやってもらっ

た行事の思い出が心に残っている

から。俺たちも、子どもたちに思

い出をしつかり残してやることで、

地域の伝統や文化を未来につなげ

ていきたい」。畝山さんの言葉に、

国定さんと平本さんも大きくうな

ずいた。

地域を思いやる心が、新山地区
に、広がっている。

新山地区自治会の主な活動

にいやま食堂

月2回、昼食を300円で提供して
いる地域のお茶の間的な存在。

草刈り・クリーン作戦

地域内の草刈りを請負い、地域の
環境保全に努める。

各種祭り

井笠鉄道記念館祭り、夏祭り、秋祭り、
公民館祭りの運営への参加。

企画は基本、「これやろうや!」
「おっしや、やろう!」の勢いと情熱だけ(笑)

勢いばかりの企画が多いので、毎回大丈夫かと
不安を感じつつ達成してますね(笑)



左から会長の関東治樹さん、副会長の久一博史さん

地域を元気に **2** するまちづくり人
Hiroshi Hisaichi

ちいさいからこそ、感じる危機感、
きめ細やかな配慮。

久一博史さん

真鍋島まちづくり連絡協議会では、「助け合い」の精神にもとづき様々な地域活動が行われています。副会長の久一博史さんは防災活動を通じて貢献されています。

人口が約230人の真鍋島。進む高齢化と、消防団員の7割近くが漁業者で緊急時に駆けつけにくいことから、島の防災は切実な課題だ。そこで、真鍋島まちづくり連絡協議会では、年に1回防災訓練を開催する。「まずは自分の身で自分で守っていく心がけが絶対に必要。習うより慣れるです」と話すのは、副会長の久一博史さんだ。

訓練と反省の積み重ねの先に

真鍋島の避難訓練では、訓練後に必ず反省会を行う。甘い物を食べたり気軽な雰囲気で行ううちに参加者から率直な意見が出るよう





様々な活動をするなかでつながりができてくると、
その人の生活や人生が見えてくる

すると、今度は、その人にとって今何が必要かということも
一緒に考えていくきっかけが生まれてくる

になった。久一さんは、出た意見を欠かさず避難マニュアルに反映し、次の訓練に活かしている。

「これを積み重ねていくうちに、ただ避難するだけではなくお互いに助け合いながら避難することが自然と身についてくるようになる。決して同じ訓練の繰り返しではないんです」と久一さん。

「島内が一致団結して一人でも多くの人が助かるようにしたい」と協議会活動の目標を語ってくれた。

島を見守る声かけ活動

こうした島の助け合いの精神は、会長の関東治樹さんが中心に行なう「なんでも屋スケット(助っ人)事業」にも表れている。生活の困りごとを手伝う支援事業だが、現在その中心的な活動として行っているのが「声かけ」だ。一人暮らしをする高齢者を中心に日々声をかけているとい



声かけは長話ではなく1~2分ほど。「こんにちは ○○さん 何かかわりはないですか」みんなありがとうと言ってくれる。



「避難」「救助」「避難生活」の3段階に分けて組み立て、意識の共有がしやすいよう工夫がされている。写真の訓練時は「避難」のもの。

真鍋島まちづくり連絡協議会の主な活動

真鍋島自主防災事業

島民の防災意識を高めるため継続的に行う。避難マニュアルを年ごとに見直し更新する。

なんでも屋スケット(助っ人)事業

一人暮らしの高齢者の日常的な困りごとにボランティアで支援する。

山道の整備と保全事業

草刈りや樹木伐採を行い、観光名所へロープの道標を設置する。

う。体調を尋ね、2、3の世間話をする、最後は全員が、「ありがとう」と言葉を返してくれるそうだ。

島の自治組織に必要なものとは何か？関東さんや久一さんたちは常に「助け合いの精神は欠かせない」と考えた上で協議会活動を行ってきた。その取り組みに、真鍋島独自のきめ細やかな配慮があふれていた。

声かけは、義務感からではなく、信頼関係により行っているんです。

防災訓練のように、年に1回でも島民が一致団結する経験をして欲しい。





左から伊木さん親子、伊藤幸子さん、小見山さん親子、
代表の浅井波津子さん、鈴木さん親子、伊藤恵美子さん

3
地域を元気にするまちづくり人
Hatsuko Asai

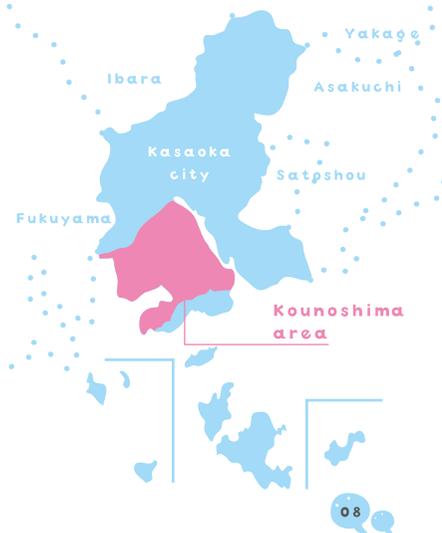
子どもも大事だけど、おかあさんも大事。
地域が親子を見守る「親子ふれあいサロン」。

浅井波津子さん

神島まちづくり協議会では、地域に住む子どもとおかあさんの交流や情報交換を目的とした活動「親子ふれあいサロン」が行われています。浅井波津子さんは現在代表として運営・企画をしています。

おかあさんの地域への第一歩を
優しく後押し

神島まちづくり協議会では、スタッフ11名が中心となって、年に6回「親子ふれあいサロン」が開催される。サロンでは子どものみならず、その親へのケアが大切にされている。「おかあさん自体が集団の輪に入っていないければ子どもも同じく孤立してしまうのですね」と話すのは、中心メンバーの伊藤幸子さんと伊藤恵美子さんだ。地域活動に参加する最初の一步を踏み出せない母親は多い。だからこそ、直接会いに行き、親しくなっただうえでサロンの存在を伝え



母親が不安感や孤独感なく

子育てができるよう、

母親同士の出会いの居場所づくりを
するのが私たちの仕事



ている。「参加すれば重い役割をまかされるのではと不安がる人も多いけれど、ここではそれらは強制しません。親子のふれあいを助け、おかささんたちが地域に溶け込むお手伝いをするのが目的です」と代表の浅井波津子さんは微笑む。

月2回開催のママ会

現在は、サロンに加えて、20代、30代の母親を中心に「ママ会」活動も月に2回自主的に行われている。伊木さんは、地域の人から声をかけられ、ママ会に参加するようになった。「子育てのなかで不安なことを打ち明けたら、『大丈夫、それは幼稚園に行ったらできるよになるよ』と言われ、心が軽くなった」と話す。サロンの行事に参加するうちママ会にも行くようになった小見山さんと鈴木さんは、今期はママ会の代表を務めている。



ママ会は月に2回、神島公民館で開催され、毎回5~6組の親子が参加する。



親子ふれあいサロンでは毎回15組程の親子が「お水遊び」や「クリスマス会」などさまざまな行事をして交流する。



神島まちづくり協議会の主な活動

親子ふれあいサロン

通園していない幼児とその母親を対象に交流と情報交換を行うほか、サロン参加者が自主的に行う「ママ会」を実施している。

芸能（音楽）鑑賞会

児童に生の音楽や芸能に触れさせることで、情操や感性を育んでいく。

えひめAIの普及、利用促進

環境浄化微生物「えひめAI-2」の培養・配布による地区内外の水質浄化を行なう。

運営面で大変なことはありませんか？と尋ねると、「好きなことをしているのです、苦になることはない」と小見山さん。鈴木さんも、「私たちは連絡係。友だちの家に行くように、気軽に公民館に集まっている」とリラックスした表情だ。

大切なのは母親同士が広くつながること。地域が親子を見守り、育てていくこと。その日集まった母親たちのそばでは、子どもたちが屈託のない笑顔で遊んでいた。

ママ会では、何をするかも毎回特に決まらず、好きなことをして好きな話をする気軽な集まりです。





左から開拓団のリーダー二階堂徳栄さん、大島まちづくり協議会 総務担当の浅野和彦さん

継続させるには、
いかにお金をかけず自分らでできることを
やっていくかが大切だと思う。

4
地域を元気にするまちづくり人
Kazuhiko Asano

浅野和彦さん

幅広い活動を展開する大島まちづくり協議会。浅野和彦さんは、総務担当として活動全体の企画・運営を支えています。

これに取り組むのが、「開拓団」のメンバーだ。二階堂さんをリーダーに、農業の経験豊富な6人が所属しており、約2町（2万㎡）もの農地で、ヒノヒカリなどを栽培している。

大島の代表的な活動の一つが、耕作放棄地の開拓だ。大島は、瀬戸内国立公園に指定される御嶽山や、瀬戸内海を見下ろす景観など自然豊かな環境である一方、年々耕作放棄地が増加し、課題となっている。

耕作放棄地の開拓



来年はこうしたほうがいいというのは
絶えず考えています。

冗談を言いながらやっていたら
いつの間にかできたりするのです。



大島の「企画力」

「開拓団」をはじめ、現在活動の中心となっているのは、60〜70代の人たち。「みんなとにかく活力に満ちています」と話すのは大島まちづくり協議会の総務担当の浅野和彦さんだ。「話がどんどん進むので、私はやりやすい方法を提案するなど、皆さんの案内役です」。

浅野さん自身も企画を考えることが好きで、「去年と同じではなくプラスアルファの変化を何かつけられないか」といつも考えている。「自分自身がまず活動を楽しむこと。結果、周囲の人も喜んでくれるならこれ以上嬉しいことはないですね」。

自立を見据えた活動へ

浅野さんたちは、現在無給のボランティアの人たちを、ゆくゆくは有給にしたいと話合っている。



テラス活動は喫茶店のように地域の方が気軽に集える場所として利用できる。



笠岡よっちゃんれの夜にも協議会で参加している。毎回趣向を凝らした衣装や道具を使って観客を楽しませている。

大島まちづくり協議会の主な活動

耕作放棄地の開拓

耕作放棄地を再生して農産物の生産と環境保全に取組む。

海の見えるテラス運営事業

老若男女が集い交流できる場をつくり
独居老人の安否確認の一助とする。

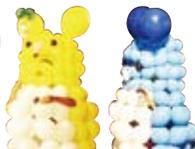
観光名所マップ作成

観光資源のPR マップの作成。

そのために特産品の販売などでの資金調達も構想する。「交付金に頼っていると悪循環になっていく。いかに自分たちができることをやっていくかが大切」。

「夢のようなことをワイワイ話しているんです。そうしていればいつか現実になるんじゃないかな」。浅野さんの目は、常に次のアイデアを見つめている。

笠岡よっちゃんれの夜恒例のバルーンアートも大島のまちづくり協議会の有志で作っています。





事務局長の山下美津夫さん（右）と、防災訓練や倉庫めぐりに参加した今井地区の小学生たち

5
地域を元気に
するまちづくり人
Mitsuo Yamashita

山下美津夫さん

自然とコミュニケーションを
とれるようになっていくこと。
それこそが災害時に役立つことであり、
まちづくりだと思う。

今井地区まちづくり協議会の事務局長を務める山下美津夫さんは、住民が参加しやすい企画と住民が自分ごととして感じられる活動をテーマに取り組んでいます。

住民が一番参加したい企画を

今井地区まちづくり協議会は平成24年に発足したが、当初から目標を防災事業と明確に定めて活動を行ってきた。出前講座や有識者を招いての講演会、防災マップの作成など、実に綿密なスケジュールが組まれてきたが、その内容については、住民参加ということに特に意識が注がれている。

例えば防災資機材庫を設置する際、その倉庫の組み立ても住民自らで行っている。「ありがたみもあるし、自分たちでつくって、自分たちで使うようにしようと思って」





防災訓練では参加者が予定よりも倍も来てくれて
参加者の防災意識を強く感じました。



会長の阪本猛さん

体験で食べる予定だった非常食が
一人半分しか食べれなかったけどな(笑)

と、事務局長の山下美津夫さんは話す。会議や企画を進めていく際にも同じ考えで「最初から地域の人に参加してもらわなければ、いざ行事をやるとなっても参画意識は生まれない」と、会長の阪本猛さんも口をそろえる。

資機材庫が完成すると、今度はその場所を子どもたちにも知ってもらえるよう、資機材庫めぐりのイベントを夏休み期間に行った。

一つの目標に向かう企画づくり

様々な取組みを担当する山下さんだが、自らこれをやりたいとは言わないそうだ。「自分の役割はみんなに意見を出してもらい、それらをまとめていくつか提案しての繰り返し。ただ今井の将来への大きな目標を明確にして1年先、3年先を見据えてみんなで進めていく」と話す。協議会の事業も最初



消防団とも協力して、放水体験も行なう。宝さがしアドベンチャーはキーワードを資機材庫に設置して、それを集めて暗号を読み解いてもらうイベント形式。地域の史跡のクイズを含めているので、子どもたちにも楽しく行え、防災意識だけでなく、郷土への理解も深まる。

今井地区では多くの人が参加しやす
いよう防災の事業が進められている。

今井地区まちづくり協議会 の主な活動

防災出前講座

字単位での防災勉強会を実施。

避難訓練

全地区参加型の年1回の訓練。

防災マップ作成

地域住民全員で作成し周知。

宝さがしアドベンチャー

子どもの交流と防災資機材庫の把握。

に2年間分計画したと言うから驚きだ。最後に活動への参加者に体験して欲しいことは何ですかと尋ねてみた。
「地域の人が自分ごととして参加し、参加者同士が知り合い、自然とコミュニケーションをとれるようになっていく。それが災害時に役に立つことでありまちづくりだと思います」。山下さんのやわらかい物腰から、地域への思いが溢れていた。

協議会やって変わったこと？
友達の平均年齢がぐっと上がりましたよ(笑)

「協働」がこれからの時代の
新しいスタイルですね。

これからは地方創生ではなく、
「地域」創生なんです。



三島紀元

×
小川孝雄

市長対談

まちづくり協議会のこれからについて、
市長と笠岡市市民活動支援センターまちづくりアドバイザーの小川さんにお話をしてもらいました。

 今回ご紹介した方たちの活動には、
それぞれに特色がありますね。

 この方たちだけでなく、市内各まち
づくり協議会で、多くの方がその地域にあつ
た工夫をしながら活動をされているんです。

 若い方や女性の方もまちづくり協議
会にどんどん参加してこられていますね。

 現在まちづくり協議会の活動は60
70歳の男性が多く参加されていますが、
活動する方の層が広がっていくと、より取
り組みも素晴らしいものになっていくで
しょうね。

 地域の宝物やプライドを見つけ発信
していくことで人が集まり、こういった活
動につながってゆくのですが、まずベース
に自分たちの命や暮らしを自分たちで守ろ
うという気持ちがあつて。

 そうなんです。
人口が減少する10年
20年後を考えたときに、単に悲しむのでは

人口減少を単に悲しむのではなく、
今できることをやるのが大切。
その拠点がまちづくり協議会。



笠岡市長
三島紀元
Norimoto Mishima

なく、今できることをやるのが大切。
みんなで考えて共通の思いや目標をつくるんです。



福祉というと、高齢者や子ども
のことだけだと思われがちだけど、
そうじゃないですよ。文字通り、み
んなに「幸せ（＝福）」が「とどまる・
たまる（＝祉）」ということだと思いま
す。それが、顔が分かっつながら
見える単位でなら実現できる。地方創
生とよく言われていますが、本当はもっ
と小さな単位をもとにした「地域」創
生なんですよ。



そして、その地域の福祉活動の
拠点、それがまちづくり協議会。いろ
んな世代の方々が集まって、仕事以外
にも社会とつながりを持って、友情や
信頼を育んでゆければ。

コミュニティコーディネーター

小川孝雄

Takao Ogawa



1953年岡山県岡山市生まれ。岡山大学法文学部経済学科卒業。
中国ろうきん地域福祉支援室長、岡山 NPO センター専務理事、岡山県ボランティア・
NPO 活動支援センター所長を経て、現在コミュニティコーディネーターとして、県
内各市町村のまちづくりにかかわる。笠岡市市民活動支援センターまちづくりアドバ
イザー、美作大学非常勤講師、岡山 NPO センター監事。



県内を見ても、小学校区を軸に市内
全域でまちづくり協議会が組織されて、か
つ交付金も出されているところは笠岡以外
にありません。笠岡は先頭を走っているん
です。



走りながら「一緒にやっぺいこう
や！」という想いなんです。今までやって
きた自負はありますが、まだまだこれから
ですね。



元々、公共というのは役所がつくる
のではなく、市民がつくってきたものです
から。それぞれのまちづくり協議会を担当
している市の職員の方々も地域の方々も、
一緒に公共をつくる仲間、当事者同士なん
ですよ。



そう、私たちは地域の皆さんと一緒に
なって公共を担いたい。昔に返るのでは
なく、「協働」をこれからの時代の新しいス
タイルとしてまちづくりを一層進めていき
ましょう。

笠岡市のまちづくり協議会一覧

